

内藤湖南が対音を付したパスパ文字資料について

吉池孝一

一

この題は一見奇異のようであるけれども、内藤湖南（以下尊称は省略に従う）と中国民族古文字資料との関係は浅くない（注1）。こうした民族古文字資料の中にパスパ文字資料も含まれる。そこで、パスパ文字と内藤湖南との関わりを示す最初期の記述を探すと「禹域鴻爪記」がある。明治32年（1899）8月末から同年11月末に至る三ヶ月に渡る中国旅行の概略を記したもので居庸関の碑文に関わる部分がある。

此より八達嶺に至る、四十清里、上ること十五里にして居庸関城あり、建築は頗る古りたれば、元末明初と定むべきか。・・・門の表裏には種々異形の像、傾斜せる蓋内には、左右各々五体の仏像、両壁には四天王像を、各々二づゝ半肉彫にし、各々二天像の間に、六種の国語を以て、陀羅尼を彫刻せり、即ち漢文、梵文、西藏文、蒙古文、畏吾兒文、西夏文なり。欧人の攷へによれば、此は元と高大なる塔の基址たりし者ならんといへり。（『内藤湖南全集第二巻』41-42頁、昭和46年、筑摩書房発行による）

「六種の国語を以て、陀羅尼を彫刻せり、即ち漢文、梵文、西藏文、蒙古文、畏吾兒文、西夏文なり」とある。ここに言う「蒙古文」はパスパ文字で記されたサンスクリット語のことであろう。その他、壁面にはパスパ文字で記されたモンゴル語も刻されていた。いずれにしても、内藤湖南とパスパ文字との関わりを示す最初の記述となる。

二

それより三年の後、明治三十五年（1902年）の大阪朝日新聞に掲載された「蒙文元朝秘史」と題する一文には次のようにある。

事林広記には、其の丁集に蒙古篆文百家姓あり。即ち真蒙文にして、本邦刻本、字体訛誤多しと雖も、若し善本を得て精訂し、之を書史会要載する所の八思巴蒙文字母に参稽せば、其の綴字の法を得難からざるべく、之より溯りて元秘史を翻して真蒙文本と為すことも或は能くすべき也。（明治三十五年二月三日「大阪朝日新聞」。上は「蒙文元朝秘史」と題する文の一部分。今は『内藤湖南全集第十二巻』151頁、昭和45年、筑摩書房発行による）

この一文については『KOTONOHA』31号（注2）で紹介した。ここに言う「真蒙文」とはパスパ文字のことであり、「之より溯りて元秘史を翻して真蒙文本と為すことも或は能くすべき也」とは、現存の漢字音写本元朝秘史を「真蒙文本」即ち「パスパ文字本」に還元することができるということである。

現存する元朝秘史は、漢字を用いてモンゴル語を音写したものである。この漢字音写本が拠った直接の底本が、ウイグル文字で書かれたものであったのか、それともパスパ文字で書かれたものであったのかということが議論されてきた。上の一文は、パスパ文

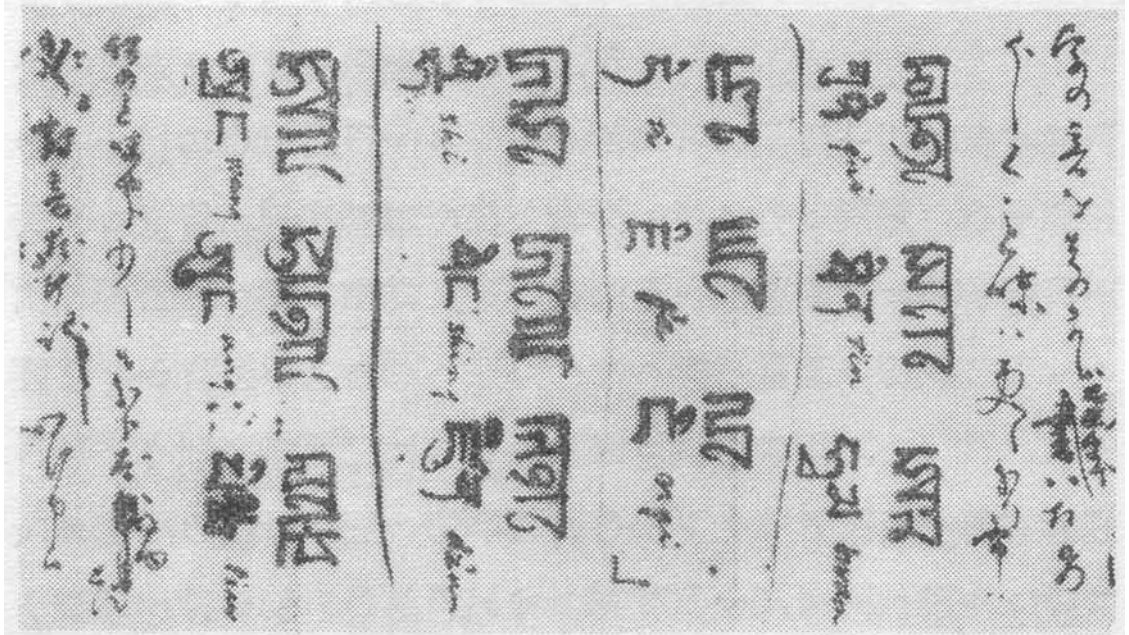
字本原典説につながる記録のうち、斯界において、少なくとも日本において、最も古いものであり、元朝秘史及びパスパ文字の研究史にとって見逃せない一文と言えよう。

三

以上は、内藤湖南とパスパ文字との関わりを示す史料である。以下に紹介する文はパスパ文字を直接扱ったもので、八月一日付の高楠順次郎氏宛書簡である。封筒は失われているけれども、その内容より、明治39年(1906)に韓国の京城より日本に宛てたものとされている。

・・・略・・・。御示し下され候硯石は多分奈良の人三輪某の所蔵ならんと存候小生も一見候事有之候これは八思巴文字には相違なきやうなれども何分漢字の音をそのまゝ八思巴字で書いたものらしく意味は更に分り不申候

(编者云く、このところに八思巴文字とその対音が書いてある。挿図参照)



何の意味やら少しも分からず候得共とにかく対音だけ記しつけ申候

(明治三十九年八月一日 韓国京城より高楠順次郎宛書簡の一部分。『内藤湖南全集第十四巻』419-420頁、昭和51年、筑摩書房発行による)

恐らく硯石に刻されたパスパ文字の拓本もしくは写真が内藤湖南に送られて来たのであろう。パスパ文字に、チベット文字とローマ字により「対音」が付されている。以下に、パスパ文字とチベット文字をローマ字に翻字し検討する。なお、パスパ文字のローマ字翻字は次のようにする(注3)。〈子音〉は、**ᠪg**、**ᠪk'**、**ᠮk**、**ᠵᠠ**、**ᠳd**、**ᠵt'**、**ᠬt**、**ᠮn**、**ᠵl**、**ᠵb**、**ᠵp'**、**ᠵp**、**ᠵm**、**ᠵf** (**ᠵf1** 奉母、**ᠵf2** 非母・敷母。f1 と f2 の区別がない場合はfとする)、**ᠵv**、**ᠵj**、**ᠵč'**、**ᠵč**、**ᠵñ**、**ᠵš** (**ᠵš1** 禪母、**ᠵš2** 審母。š1 と š2 の区別がない場合はšとする)、**ᠵž**、**ᠵj**、**ᠵc'**、**ᠵc**、**ᠵs**、**ᠵz**、**ᠵ**、**ᠵh** (**ᠵh1** 匣母、**ᠵh2** 曉母。h1 と h2 の区別がない場合はhとする)、**ᠵγ**、**ᠵy** (**ᠵy1** 喻

母、**𑄆y2** 幺(影)母。y1 とy2 の区別がない場合はyとする)、**𑄆**、**𑄆r**、**𑄆q**、とする。
 〈半母音〉は、**𑄆ü**、**𑄆i**、とする。〈母音〉は、**𑄆u**、**𑄆i**、**𑄆/𑄆/𑄆/𑄆** é、**𑄆e**、**𑄆/𑄆o**
 とし、母音のaを補写する。チベット文字のローマ字翻字はワイリー的方式(注4)にしたがう。上掲写真はやや不鮮明であるため、書簡中のローマ字の読みとりについては困難な所があるけれども、他日書簡の実物により確認するまでの処置として次のように提示しておく。

	パスパ文字	チベット文字	ローマ字
1-1	geui	gu'i	g'ui
1-2	t'én	thin	t'in
1-3	fam	hwam	hwam
2-1	ti	ti	ti
2-2	ǰi	ji	j'i
2-3	ŋi	ngi	ngi
3-1	šhi (š2hi)	shhi	shi
3-2	šij (š1ij)	shing	shing
3-3	jun	dzun	dz'un
4-1	'üaŋ	wang	wang
4-2	'euŋ	ung	ung
4-3	biv	piw	piw

上では便宜的に、書簡の右より順番に、一行目、二行目、三行目、四行目としたけれども、この四行が硯石にどのように刻されていたかが先ず問題となる。それというのも、パスパ文字によって記された文章は、漢語であれモンゴル語であれ、何語であれ、通常は縦に左から右に行を追って読み進むことになる。それで、硯石にどの様に刻されており、それをどの様に書簡に採録したかということが問題となる。左から右にならんでいたものを、漢字漢文風に右から左に並べ替えて採録したということも考えられなくはないが、もしそうであるならば、書簡の受取手に一言その旨を述べ添えるのが自然であろう。そのような一言がないことより推して、硯石の文字の並びと書簡の文字の並びとの間に大きな懸隔はなかったとして良いのではなかろうか。なお、二行目末尾にカギ括弧があり、四行目の二字目と三字目の間に記号：がある。このことから、一行目と二行目は一つの纏まりで、三・四行目とは区別された配列となっていたことがわかる。さらに四行目の二字目と三字目は連続しないこともわかる。種々考えてみた結果、四行の並び順について幾つか可能性はあるけれども、蓋然性の高いものとして次の二つを挙げておきたい。一つは、書簡そのまま、四つの行を縦に左から右に読むというものである。いま一つは少々複雑で、左に三行目と四行目が続けて縦一行に記されており、右に一行目と二行目が続けて縦一行に記されていたというものである。この二行を書簡にバランス良く記すため、四行に分け、カギ括弧を付してそれぞれの行の纏まりを示したも

のが現在の形と考える。この場合、読みの順番は三、四、一、二となる。ここに述べたようなことは、硯石の実物さえあれば必要のないことであるが、それを見ることのできない現在にあつては、いろいろと可能性を探ってみるしかない。

硯石には何が書かれているのであろうか。書簡に湖南自身が「何の意味やら少しも分からず候得共」と記してあるとおりで、「四、三、二、一」の順に見ても、「三、四、一、二」の順に見ても、報告できるような結論を得ることはできなかった。しかしながら、パスパ文字の研究史にとって貴重な史料ともなる故、個々の文字について詳しく述べておきたい。もとよりこれは書簡の一部であり、正確さが求められるものではないけれども、個々の文字について検討しておくことは、今後この資料の内容を再検討する際に参考となるであろう。

四

硯石にはパスパ文字のみが刻されていたはずである。そのパスパ文字を、チベット文字に置き換え、さらにそれをローマ字に置き換えている。このようなローマ字への変換の手続きは正当なものと思われる。これが内藤湖南独自の考えによるものか、あるいは西欧の先行研究によるものか、先行研究によるものならばそれは何であったか、興味深いところであるけれども調査中であり今後の課題とせざるをえない。なお、チベット文字のローマ字化の仕方は A.H.Francke (1905) とほぼ同様であることから (注 5)、この系統の方式を参照したとみてよからう。




さて、内藤湖南は、パスパ文字は漢語音を記したものとしている。先ずこの点を確認しておきたい。漢語音であることは、2-1 の ti における声母 t および 3-1 の韻母 hi からわかる。声母 t は、漢語の旧全濁音 (有声音) に対応し、モンゴル語の固有語の表記にはふつう使用されない。また hi は漢語の中舌母音/a/の表記に専用されるものである。もともと湖南自身がどのような点によって漢語音と判断したものか明らかではない。




以下、1-1 より順に問題となる部分につき検討する。










・1-1 のパスパ文字は **geui** とあり、チベット文字は **gu'i**、ローマ字は **g'ui** とある。ここには問題となる点が三つある。一つ目の問題は、パスパ文字全体の綴り方である。蒙古字韻や元代碑文のパスパ文字漢語には **geui** という綴りはない。これに相当するものとして **geuè** がある。もともと後代の資料には音節末の **è** を **i** とする資料がある。これは『KOTONOHA』25 号 (注 6) で述べたことであるが、パスパ文字百家姓の諸本のうち、明代の唐順之撰『稗編』 (注 7) 所収のもの及び清代の袁氏貞節堂抄本影印になる『譯語』 (注 8) 所収のものでは、「衛魏水韋雷皮季危梅賁崔裴惠芮糜隗籍桂國夔」など『蒙古字韻』の支韻に相当する諸字をパスパ文字で表記する場合、音節末の **è** を **i** としている。これは音韻変化に関わるようなことではなく、後代の編纂者が、支韻諸字の音節末尾に綴られる **è** という規範的な表記を理解せず、これを実際の発音に合わないとは判断し、**è** に取り替えて新たにパスパ文字百家姓の改訂版を作ったためであろう。このような事情からみて、書簡の **geui** という綴りが、内藤湖南の誤写でないとしたならば、硯石のパスパ文字は元代ではなく明代以降に刻されたという可能性もでてくる。

二つ目の問題は、チベット文字の **gu'i** とローマ字の **g'ui** において、パスパ文字の **ㄍ e** が反映されていないことである。同様に、4-2 の 'eun においても、チベット文字、ローマ字ともに **ung** であり、**e** は表記されない。もともと、**ㄍ e** は、チベット文字の中に対

応するものを見いだすことは困難で、何に由来するものか現在においても定説をみていない。対応するチベット文字は不明ということで表記されなかったものか、それとも装飾と見ていたものか、事情は不明であるが、偶然の脱落ではなく対音の方法の一つなのであろう。


三つ目の問題は、e と u の間に付された連結線  である。4-2 にも e と u は綴られているけれども連結線は使用されない。連結線の無い綴りが正式なもので、geui に見られる連結線は余分である。


・1-2 のパспа文字は t'én と in と見える。チベット文字は thin、ローマ字は t'in とある。蒙古字韻や元代碑文のパспа文字漢語には t'in という綴りの音節はないから、1-2 は t'én でしかありえない。これを湖南自身は t'in と見てチベット文字を thin、ローマ字を t'in としたわけである。湖南自身の考えとは別に、引き写されたパспа文字の字形自体は、i よりも é に近く見える。


・3-1 のパспа文字は šhi とあり、チベット文字は shhi、ローマ字は shi とある。翻字法が異なっているため少々込み入っているけれども、パспа文字の声母 š がチベット文字とローマ字の sh に対応し、パспа文字の韻母 hi が、チベット文字の hi、ローマ字の i に対応する。さて、漢語を表記するパспа文字には二種の  š がある。すなわち、禅母の  š1 と審母の  š2 である。碑文では両者区別されない場合が多い。ここでの翻字法として、区別のない場合は数字を付さず š とする。それで、両者を区別する蒙古字韻のパспа文字漢語に拠ると、š1hi という綴りの音節はく、š2hi という綴りの音節はある。したがって、3-1 の声母は  であり、音節全体としては š2hi が意図されていたはずである。もっとも碑文においては多くの場合、字形の上では禅母  š1 と審母  š2 は区別されないから、この硯石の場合、いずれであったかということが問題となる。3-2 の  š と見比べた印象によると、3-1 は 、3-2 は  というように、やや区別が保たれているように見えるけれども、明瞭とは言い難い。そこで、ここでは šhi (š2hi) としておく。漢字の候補を探す際には先ず š2hi から始めると良いということである。

3-1 には、いま一つ興味深い点がある。パспа文字では、漢語の中舌母音/a/を子音字母 h と母音字母 i を組み合わせせて hi と表記する。その hi につき、チベット文字の対音ではパспа文字をそのまま翻字し hi とするけれども、ローマ字では h を削除し母音 i のみとする。これは偶然の脱落ではなく対音の方法の一つなのであろう。

・3-2 のパспа文字は šij とあり、チベット文字、ローマ字ともに shing とある。蒙古字韻のパспа文字漢語によると šij には š1ij と š2ij の二種がある。3-1 で述べたように、この場合は š1ij のようにも見えるけれども明瞭とは言い難い。そこで、ここでは šij (š1ij) としておく。漢字の候補を探す際には、先ず š1ij から始めると良いということである。

・3-3 のパспа文字は jun とある。声母の規範的な字形は  であるが、ここでは縦の二画が足りない。

・4-2 のパспа文字は'eun とあり、チベット文字、ローマ字ともに ung とある。1-1 と同様に、チベット文字とローマ字の対音において、e は表記されない。

・4-3 のパспа文字は biv とあり、チベット文字、ローマ字ともに piw とある。パспа文字の  は有声音のチベット文字 b に対応するから、チベット文字、ローマ字ともに

biw とすべきところである。なお、言うまでもないことであるが、音節末の v と w の違いは、私が採用した翻字法の違いが反映したにすぎない。なお、漢字の候補を探す際には bév という音節も考慮に入れるべきであろう。

五

以上、読めない資料につき長々と述べてきたけれども、この硯石は今後実物が出てくる可能性もある故、このような作業もまったく無駄なことではないであろう。また、明治 39 年（1906）に内藤湖南によって書かれたこの書簡は、私信とは言え記録に残るもののうち、パスパ文字をローマ字に置き換えるという研究法に関していえば、管見による限り日本に於ける嚆矢である。先に挙げた明治三十五年（1902 年）の大阪朝日新聞に掲載された「蒙文元朝秘史」と同様、この書簡もパスパ文字の研究史にとって見逃せない一文と言えよう。

注

- 1) これにつき、和田 清著『東亜史論叢』（昭和十七年十二月、生活社発行）には次のようにある。「那珂博士に次いで、尤も満蒙史の研究に潜念した学者は、京都の湖南内藤虎次郎博士である。博士は既に明治三十三年に於いて「明東北疆域弁誤」一篇を著し、永寧寺の碑拓を用ひて、「満洲源流考」等の謬説を正し、明初の東北疆域が遠く黒龍江口にまで及んだことを論證されたが、尋いで同三十五年三月には史学雑誌に「蒙文元朝秘史」の解題を試み、三十九年六月には早稲田文学誌上に、「奉天宮殿にて見たる凶書」のことを論じ、同四十一年六月には遂にその新獲の史料の一部を整理して「満洲写真帖」一卷を公にされた。」（和田 249-250 頁）
- 2) 吉池孝一「内藤湖南と元朝秘史パスパ文字本原典説」『KOTONOHA』第 31 号（2005.6.28）pp.9-11。
- 3) この翻字案は「言語文化接触に関する研究」（AA 研。平成 12 年 3 月 24 日）で公表したものに改訂を加えたものである。
- 4) T. Wylie: A Standard System of Tibetan Transcription. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 22,1959,pp.261-267.
- 5) T. Wylie (1959) 262 頁のローマ字化方式の一覧表を参照。
- 6) 吉池孝一「パスパ文字百家姓諸版本に於ける姓の配列順序などについて」『KOTONOHA』第 25 号（2004.12.28）pp.9-18。
- 7) 明代の唐順之撰『稗編』（序年萬曆辛巳 1581 年）卷八十一「蒙古文」所収の「百家姓蒙古文」。『稗編』所収の百家姓として『稗編 附：索隱』（新興書局、1972 年。明・萬曆辛巳年一五八一年刻本）と欽定四庫全書所収本の二種を見ることができる。両者に有意な相違はない。細部にあつては、四庫全書所収本が萬曆刻本の誤を更に拡大したと考えてよい点がみうけられる。
- 8) 無名氏撰『譯語』（『北京図書館古籍珍本叢刊 6 経部』所収。清袁氏貞節堂抄本影印とある）「蒙古字体」所収の「百家姓蒙古文」。本資料の解題として竹越孝 2000（「『譯語』の「八思巴字字匯」について」鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第 51 号）が詳しく参考となる。